

「男、突っ走る！」

第12回

第一稿

作・壽倉 雅

1 北海道・旅館・全景（朝）

2 同・同・一室

雅也が眠っている——ゆっくり目を開けると、隣に賢哉の両足があることに気づく。

雅也、慌てて飛び起きる。

雅也「ん！？」

既に起きている悠喜と壮吾がトランプで遊んでいる。

悠喜「あ、起きた？」

壮吾「おはよう」

雅也「おはよう」

と、賢哉の姿を見る——雅也の足元に賢哉の頭があり、寝相が悪い状態でいびきをかいている。

雅也「かどけん、寝相悪すぎだろ」

と、賢哉が屁をする。

雅也「もうッ……」

と、賢哉の尻を叩く。

賢哉「いてッ……。 (と目を覚ますと) あれ、
もう朝か」

雅也「ねえ、寝ながら屁をこくなよ」

賢哉「仕方ねえだろ、出ちゃうんだから」

雅也「臭いんだから」

悠喜「結構おならしてたぞ」

賢哉「マジか？」

雅也「もう、一緒に寝る人の気持ち考えてよ」

賢哉「わりいな」

雅也「悪いと思っただけなくせに」

寝起きで不機嫌な顔になっている雅也。

3 道を走る観光バス

4 北海道・とある川

雅也、賢哉、悠喜、壮吾、他数名の男子生徒が乗ったボートが川を下っている。インストラクターの動きに合わせて、それぞれカヤックをもって水を漕いでいる。

雅也「ラフテイニングって、こんなに大変なの」

賢哉「お前こんなことで疲れたのか」

雅也「だって、俺かどけんと違って腕力ないから」

インストラクター「もうすぐ下流に着きます。

水深が低くなっているので、飛び込んでも

らつても大丈夫です」

賢哉「よし、飛ぶか」

悠喜「そうだな」

壮吾「行くか」

と、次々に飛び込んでいく賢哉、悠喜、

壮吾。

雅也「マジか、お前ら……」

賢哉「お前も飛んでみるよ」

雅也「え……」

賢哉「大丈夫だって。足、ギリ届くから」

雅也「……分かったよ。（とボートの上でジ

ヤンプして）よいしょ！」

と、飛び込む——全身が水中に一瞬隠れるが、すぐに浮かんでくる。

雅也「思ったより深いじゃん！」

悠喜「楽しいだろ」

雅也「うん、こういうの嫌いじゃない」

笑い合っている一同。

N「小樽観光、ラフティング、白い恋人パーク見学など、北海道を十分満喫した二泊三日の修学旅行は、あっという間に終わってしまったのでした」

5 中央高校・全景（朝）

N「しかし、その一週間後……」

6 同・2年2組教室

雅也がマスクをして登校してくる——
少し咳き込んでいる。と、自席に座ると、賢哉に、

雅也「おはよう」

と、賢哉が振り返る——賢哉もマスクをして咳き込んでいる。

雅也「あれ、どうしたの？」

賢哉「お前こそどうしたんだよ」

雅也「修学旅行の後遺症かな」

賢哉「お前もか……」

雅也「五月の北海道の川をなめてた」

賢哉「だな。あんなに冷たいとは思わなかった」

雅也「確かに寒かったもん。それに、移動中のバスから見えた北海道の景色、日陰にまだ雪の塊が残ってた」

賢哉「よく見てたな」

雅也「日陰とはいえ、雪が溶けてないってことは、やっぱりまだそれぐらい寒いってことだよな」

賢哉「そういうことになるな（と咳き込む）」

雅也「うつさないでよ、風邪」

賢哉「同じセリフ、そっくりそのまま返すよ」

雅也「はいはい」

賢哉「バカは風邪ひかないって、あれ嘘だな

雅也「うん」

賢哉「おい、否定しろ」

雅也「何で」

賢哉「お前も強くなったな」

雅也「元々こんなんですよ」

と、悠喜が登校してくる。

悠喜「おはよう。あれ、どうしたの二人とも」

賢哉「志田は何もなかったみたいだな」

悠喜「二人揃って風邪ひいたのか？」

雅也・賢哉「修学旅行の後遺症」

悠喜「は？」

賢哉「川に飛び込んだだろ。あれが原因」

悠喜「それで風邪引いたってこと？」

雅也「うん。鼻水止まらないし、喉も痛いし

……もうラフティングは当分やらない」

悠喜「それはご愁傷様で」

7 同・コンピュータ室

雅也が入ってくる——孝之、美彩、春

奈が作業をしており、その後ろに寧々

とクラスメイト・杉山優菜（17）が

自習をしている。

美彩「あれ、パンティンどうしたの？」

雅也「風邪ひいたの」

寧々「修学旅行の後遺症だって」

孝之「川飛び込んだんでしょ？　うちのクラ

スも同じような症状の子いますよ」

春奈「うちのクラスの男子も、マスクして咳

き込んでる子、何人かいたよ」

雅也「やっぱりね。（と優菜を見て）珍しい

じゃん、濱口だけじゃなくて今日は優菜も

いるなんて」

優菜「私も寧々と一緒に検定勉強しに来たの」

雅也「そっか」

N「クラスメイトの杉山優菜。昨年からクラ

スが同じで、実は濱口や春奈、美彩と同じ

中学校ということは、最近になって知った

情報です」

優菜「私、今度二級受けるの。それで、寧々

も受けるっていうから一緒に勉強しようと

思ってた」

雅也「そっか。まあ、ここだったら情報処理

検定に詳しい先生もいらっしやるし、実技試験の練習もできるもんね」

優菜「何かあったら、うちーに聞かかも」

雅也「どうぞどうぞ」

と、大きなくしゃみをする。

春奈「今日は休んだら？ 無理に部活来なく

ても良いじゃない」

美彩「そうだよ。私たちが菌もらっちゃうこ

とだってあるんだから」

雅也「そうだね。じゃ、今日はお言葉に甘えて休みます」

優菜「分からないことあったらメールする」

雅也「いつでもどうぞ。じゃ、また明日」

と、出ていく。

8 木内家・雅也の部屋（夜）

ティッシュで鼻をかんでいる雅也――
鼻をすすりながら、パソコンで脚本を
書いている。

N 「僕はこの頃から、本格的に脚本を書き始

めていました。脚本の書き方や知識は、ネットですぐ調べた独学でしたが、まずは一作品として書き上げてコンクールに応募しようとして決めていました」

と、パソコンのメールの通知が来る――確認する雅也。

雅也「（つぶやいて）ゆないってとさんから、フォローされました？ 誰だろ」

と、ブログのページを開く。『ゆないてつとの徒然ブログ』というブログの画面になる。ブログを読んでいく雅也。

9 中央高校・2年2組教室

雅也が登校してくる――優菜が来ると、優菜「ねえ、うちー。昨日ブログフォローしたけど、分かった？」

雅也「ブログ？（と何かを思い出して）あ、ゆないってとってそういうこと……」

優菜「あれ、もしかして私って気づかなかつた？」

雅也「気づくわけないでしょ。でも、ゆない
てつとで、今ピンときた」

優菜「私も、ブログに興味があつてさ。ブロ
グっていつても、うちーみたいに文章力
はないから、簡単に私の日記みたいにしよ
うと思ってるんだけどね」

雅也「じゃあ、記事投稿したらコメントしと
くよ」

優菜「ありがとう」

雅也「あ、そーびもブログやってるんだけど
さ、良かったらフォローしてあげて」

優菜「分かった。あの子は、何のブログやっ
てるの？」

雅也「釣りブログ。そーび、結構釣り行って
るみたいで、その様子をアップしてるの」

優菜「そうなんだ」

雅也「かどけんもブログやってるんだって」

優菜「ああ、かどけんはいいや」

雅也「え？」

優菜「私、ああいうタイプ苦手さ」

雅也「どうして？ かどけんは良い奴だよ。

確かに無断バイトやったり、競艇やったり、平気で人の道に外れてるしようもない奴だけど、根は良い子だよ」

優菜「何が嫌いなのかわからないけど、私は別に仲良くなりたいとは思わないかな」

雅也「何でうちのクラスって、男子と女子の壁がこんなにあるんだろっね。去年の一年間は一体何だったの」

優菜「私、結構ドライだから」

雅也「言われなくても分かってるよ。まあ、人間だから嫌いな人の一人や二人いるのはしょうがないか」

優菜「あれ、随分寛容になったじゃん。去年まではリーダーだったら、全員と仲良くないべきだって固い理論唱えてたくせに」

雅也「俺だって、嫌いな人いるからさ……だから、リーダーは全員と仲良くなるべきだなんて、机上の空論を言うことは、もうやめたの」

優菜「うっちーだって、やっぱり嫌いな人いるんだ」

雅也「まあね」

優菜「誰？」

雅也「それ聞いちやう？」

優菜「うん」

雅也「（小声で）光岡君と、今年からクラス一緒になった原島」

優菜「ああ、あの子ね」

雅也「かどけんから、原島のふてぶてしさは聞いてたけどさ、あそこまで自己中な性格な奴は、さすがの俺でも無理」

優菜「（苦笑して）やっぱり、うっちーにもそういう苦手な人いるじゃん」

雅也「でも、それをあからさまに出してないでしょ。それに比べて、男子と女子の関係性なんて、もうあからさまに嫌いオーラ出してるんだもん。さすがにそれはやめてっ
て話だよ」

優菜「……」

雅也「上手いことやってよ。優菜ならできる

って」

しよっぱい顔の優菜。

10 同・全景（一ヶ月後）

雨が降っている――。

11 同・中庭

ゴミ箱に入った缶とペットボトルのゴ

ミを水洗いして処分している雅也――

五十川もゴミ箱を持ってやってくる。

孝之「この時期は飲み物のゴミが多いよね」

雅也「ああ、五十川君。そうなの。特にうち

は男子が多いでしょ。梅雨に入って蒸し暑

くなってきたのか、みんなすぐジュース買

うんだよ。もうあつという間に飲み物のゴ

ミが増えちゃって。しかも、たちが悪いの

は飲みかけが多いんだよね。飲むんだった

らさ、ちゃんと綺麗に飲み干してほしいわ」

孝之「二組は大変ですな」

雅也「整備委員になんてなるんじやなかった
って思ってる。まあ、今頃後悔しても遅い
けどね」

孝之「前期で整備委員なんてやったら、絶対
この時期はこういうゴミの処分が待ってる
んだもの。後期になったら、寒くなってジ
ユース買う人も減るから、こうはならない
だろうし」

雅也「こうやって話してる間にゴミ処分して
るはずなのに、見てよ、全然ゴミ減らない
んだから」

孝之「やっぱり、男子が結構飲むから？」

雅也「そりゃそうでしょ。五十川君のところ
の六組は男子女子の比率が良いから、こう
はならないでしょ。（と孝之が持ってきた
ゴミ箱を見て）ほら、もうそっち終わるじ
ゃん」

孝之「前期の整備委員の宿命ってやつですね。
（とゴミ箱を水洗いすると）じゃあ、お先
に」

と、ゴミ箱を持って去っていく――た
め息をつきながらブツブツ文句を言っ
てゴミの処分をする雅也。

12 同・2年2組教室

雅也がゴミ箱を持って戻ってくる――
既にホームルームが終わっており、帰
る生徒もいる。

雅也「あれ、ホームルーム終わっちゃった
の？」

寧々「やっぱり、まだゴミの処分してたんだ」

優菜「もう終わっちゃったよ、帰りのホーム
ルーム」

雅也「まさかの置いてけぼり喰らっちゃった
感じ？」

寧々「生徒全員揃ったのを確認してからホー
ムルームやれば良いのにさ、自分が早く終
わりただけでしょ、きつと」

雅也「あれ？ 濱口、もしかして西澤先生の
こと苦手？」

寧々「好きじゃない」

雅也「少しはオブラートに包みなさいよ」

寧々「嫌いなものは嫌いなの」

雅也「ホームルーム、何か連絡事項あった？」

優菜「来月から教室が変わるって」

雅也「教室が変わるって何？」

優菜「ここの校舎、耐震工事するから立入禁止になるんだって。私たちは職員室棟の二階の定時制が使ってる教室に一時的に引越すの。夕方からは定時制の人たちが使うから、教室であまりゆっくりもできないし、置き勉強もできないって。あと、帰りのホームルームが終わったら、定時制の人が使えるように机の配置を直してから帰るようにしなきゃいけないんだって」

雅也「定時制の人とシェアすると、いろいろと不便かもしれないね。てか、そんな大事な連絡があるのに、俺のことほったらかしかい」

寧々「無責任だよね。だから嫌いなもの」

雅也「そういうことねえ……」

優菜「あ、あとプリント配られてた。(とプリントを渡すと)生徒会からの案内で、学校祭の実行委員会を募集するんだって。興味ある人は、生徒会室にある名簿にクラスと名前を書くようになって」

雅也「学校祭の実行委員会かあ……」

寧々「木内、好きそうだよね。こういうの」

雅也「去年はまだ学校祭のイメージがなかったから、何もやらなかったけど、今年はやってみようかな。何か、こういう実行委員会って楽しそうじゃん」

寧々「そうかなあ。いろいろと面倒臭いこと多そうじゃん」

雅也「そういう裏方をやるから良いんじゃない。楽しいイベントを一から企画して、創り上げていくんだよ。こういう経験も、何か脚本に生かせるかもしれない」

優菜「脚本って、何？」

雅也「え……？」

寧々「あれ、優菜知らないの？ 木内、趣味で脚本書いてるんだよ」

優菜「脚本って、あのドラマとかの台本のこと」

雅也「うん。書いたやつは、コンクールに応募してる。けど、なかなか良い結果はもらえてないけどね」

優菜「あ、そういえばブログでそんなようなこと書いてたね」

雅也「うん」

優菜「そういう執筆活動できるってすごいじゃん。今度読ませてよ」

雅也「え、何だか恥ずかしいな」

優菜「どうして。私、そういう物語読むの大好きだもん」

雅也「じゃあ、今度持ってくるよ。でも、あまり期待しないでよ。独学で、ただの素人の創作活動なんだから。それに小説と違って脚本だから、読み方や見せ方も違うけど大丈夫？」

優菜「そんなこと気にしない。うちーが、
どんな世界観で書くのか、それが楽しみな
の。私、文章力ないから、脚本とか小説と
か、長い文章書ける人、すごいと思うもん」
雅也「今、また新作書いてるの。それができ
たら、読ませてあげる」

優菜「ありがとう、楽しみにしてる」

寧々「好きな脚本家の影響で、ホームドラマ
が多いんだよね？」

雅也「まあね。でもね、何とかいろんなジャ
ンルが書けるように、苦戦しながらだけど、
今いろいろ書いてるところ」

寧々「検定勉強もやったり、本当に何でもや
っちゃうんだね、木内は」

雅也「貧乏性なのかもしれない。何かやって
ないと落ち着かないの」

優菜「いろんなジャンルの作品読めるの、楽
しみにしてる」

雅也、大きくうなづく。

雅也がやってくる——誰もいない。

雅也「失礼します」

と、辺りを見回す。バインダーに挟ま
っている記入表を見つける。

雅也「これか……」

と、バインダーを手にすると、挟まっ
ている鉛筆で記入表に『二年二組 木
内雅也』と記入し、バインダーをもと
の位置に戻す。

雅也「よし、これでオッケー。失礼しました」
と、出ていく。

N「この学校祭の実行委員会に関わることが、
後に僕の高校生活に大きな影響を与えるこ
とになるうとは、この時はまだ知る由もな
かったのです」

つづく